

## 山形テレビ

### 事業の名称

自治体・大学・放送局による「郷土の遺跡アニメーション復元と番組制作体験」によるメディアリテラシー活動

### 共同で事業を実施した団体

東北芸術工科大学、遊佐町（ゆざまち）教育委員会

### 事業概要

山形県遊佐町にある縄文遺跡は2020年に国史跡として指定され、縄文文化を解明するうえで、重要な遺跡となった。そこで地元の小学生に向け、縄文遺跡を学習する歴史講座を開催し、縄文人の暮らしや生活、集落などを理解してもらった。そのうえで、学習したことをもとに、縄文人の暮らしを再現した1分の再現アニメーションに付けるナレーションを考えて発表してもらった。どのようなナレーションを付けるとわかりやすく情報を伝えられるかを考えてもらい、ナレーションの違いで情報の読み手の捉え方が変わることを学べるようにした。

再現アニメーションは東北芸術工科大学の工藤薫准教授（専門分野はビジュアルデザインやCG、空間インスタレーション）が制作。歴史文化としての正確性を担保するため、同大学で遊佐町の遺跡調査に関わる青野友哉准教授に監修を依頼した。

また、歴史講座の開催については遊佐町教育委員会のコーディネートのもとに実施。再現アニメーションは遊佐町へ寄贈し、地元の郷土歴史学習などに活用いただく。

### 事業の成果

2023年11月24日（金）、遊佐町立遊佐小学校6年生の3クラス、約80人に対して、授業を実施した。

#### ①地元の遺跡を学ぶ

はじめに、地元にある山形小山崎遺跡について学んだ。同遺跡は、縄文中期末から後期を中心とする集落と水辺遺構が国の史跡に指定され、保存されている。山形テレビの高橋尚毅・経営戦略局ビジネス事業開発部長が「4000年前の遊佐町で縄文人はどんな暮らしをしていたのか」を説明し、アニメーションの静止画を用いて、映像に



何が映っているかを確認。児童に山や池の名前を質問したほか、「かごの中に何が入っていたと思うか」などと問いかけ、当時の暮らしを想像するよう促した。

## ②ナレーションを考える

続いて、東北芸術工科大学が制作した1分のアニメーションを見た後に、児童を3～5人のグループに分け、そのアニメーションに付けるわかりやすいナレーションを考えてもらった。グループワークの時間は15分程度で、山形テレビの担当者が各班を回り、それぞれのカットはどんなことをしている様子だと思うかなどを児童に尋ね、説明の仕方や着眼点を示すなど、ナレーション原稿をまとめるにあたってアドバイスした。

## ③アナウンサーが読み上げる

児童が作成した原稿をもとに、山形テレビの望月雅人アナウンサーがアニメーションに合わせてナレーションを読み上げた。説明する内容や文言の違いだけではなく、「たくさん魚が捕れた！」と当時の縄文人のセリフを入れたものや、「今では冷蔵庫を使って保存していますが」と現代との比較を示すなどの表現がみられた。

児童からは以下のような感想があった。

- ・ ナレーションを考えるのが難しかったが、自分で原稿を考えるのが楽しかった。
- ・ 映像が一緒でもナレーションが違うだけで印象が変わった。
- ・ 他の班の人たちが考えたナレーションを聞くと、アニメの内容が違って見えた。

同じアニメーションでもナレーションが違うことで、情報の受け取り方に違いが生まれることや、伝えたいことをわかりやすく伝えることの大切さを学んでもらえた。情報の受け取り方の違いを意識することでメディアリテラシーを学ぶ有意義な機会を提供できたと考える。



11月28日(火)、今回の事業で制作した映像を遊佐町に寄贈した。この映像は、遊佐町の資料館等で放映し、郷土学習へ利用していただく。

以 上